

イバン 「**ロンシャ**……………」

ロンシャン 「1、2、3、4……………」

イバン 「……………」

ロンシャン 「ふう、ん？**イバン** じゃないか？何か用かい？」

イバン 「**ロンシャン**様、今何をされていたんですか？」

ロンシャン 「見てのとおり筋トレだよ。」

イバン 「ごめんなさい、邪魔をしてしまいました。」

ロンシャン 「いや、いいよ、今予定のセットが終わったとこだ、次までインターバルを置くから、今ならいいよ。」

イバン 「**ロンシャン**様は、常日頃から体を鍛えているんですね。」

ロンシャン 「ああ、これは格闘家のたしなみだからね。」

イバン 「**ロンシャン**様、華奢に見えて筋肉質なんですね。」

ロンシャン 「自慢じゃあるが体脂肪率9パーセントさ。」

イバン 「素敵ですね。」

ロンシャン 「で、何か用があったんじゃないのかい？」

イバン 「いえ、ほれほれしてたら用事を忘れてしまいました。」

ロンシャン 「ふ～ん、そうかい、じゃあ僕の方から聞きたいことがあったから聞くよ。」

イバン 「はい、どうぞ。」

ロンシャン 「お前、**女王**の回し者なんだろ？」

イバン 「はい。」

ロンシャン 「やけにあっさり認めたな、で、**女王**は何を企んでるんだい？」

イバン 「何にも。」

ロンシャン 「おいおい、じゃあ何でお前が送り込まれて来たんだよ？」

イバン 「それがですね、こういうことなんです。」

女王 「**イバン** ！**イバン** ！いる？」

イバン 「はい、**女王**様、ここにいます。」

女王 「あなた、**ロンシャン**さんのところに潜り込んでください。」

イバン 「はい、わかりました。」

女王 「あそこには、もう**ウオッカ** と**こいし** ちゃんが潜り込んでいるけど2人だけじゃまだ心配だわ。」

イバン 「で、潜り込んで僕は何をしたらいいですか？」

女王 「**ロンシャン**さんの動きがあれば教えて、あと行動は任せるわ。」

イバン 「暗殺とか。」

女王 「いえ、そんなことはしなくてもいい。」

イバン 「何かお考えがあるのですか？」

女王 「いいえ、今回はこちらからは動かず、様子を見ようかなって思ってる。」

イバン 「そうですか。」

女王 「だから、**ロンシャン**さんの動きを見張ってて、あとは、あなた自分がやりたいようにやっていいわよ。」

イバン 「わかりました。じゃあ好きにさせてもらいます。」

女王 「ふふふ。あなたは存在自体が地雷だからね。あっちがどう動くか楽しみ。」

イバン 「というわけなんです。」

ロンシャン 「ふ～ん。じゃあ今回は、**女王**の方からちょっかいをかけてくることはないんだな。」

イバン 「はい。」

ロンシャン 「じゃあ何でぼくを麻酔銃で撃ったんだよ！」

イバン 「あれは単に僕の趣味です。」

ロンシャン 「・・・・・・・・・・・・・・・・。お前が地雷だって意味がわかったよ・・・・・・・・。」

イバン 「僕の方からも聞いていいですか？」

ロンシャン 「なんだい？」

イバン 「**ロンシャン**様は、これからどうするんですか？」

ロンシャン 「実は、まだ何も考えてないんだよ。」

イバン 「そうなんですか。」

ロンシャン 「さあ、これからどうしようかな。」

イバン 「あのう、**ロンシャン**様。」

ロンシャン 「ん？なんだい？」

イバン 「何かをすることとして、僕も**ロンシャン**様のお側にいて一緒に行動してもいいですか？」

ロンシャン 「いいよ。」

イバン 「わ～い やった～ ばんざ～い 」

ロンシャン 「そういえば、**あゆみ**は掃除係になったんだったな。」

イバン 「はい。そうですか。」

ロンシャン 「**あゆみ**も、また側近に戻してやろうかな。」

イバン 「**ロンシャン**様がお決めになることなら、僕は別に逆らいませんが、だけど・・・・。」

ロンシャン 「だけど、何だい？」

イバン 「ダブル**ミミロップ**なんて扱うのが大変なんじゃないですか？」

ロンシャン 「そうかな？」

イバン 「まあ、**ロンシャン**様ご自分でお決めください。」

ロンシャン 「そうだな。どうしようかな・・・・。まあ、あとでゆっくり考えるよ。」

あゆみ 「へっくしょん！ふう。だいぶ寒くなってきたわね。それとも誰か私の噂でもしてるのかしら？でも、どうでもいいわ。早くお掃除すませちゃお。」

はきはき

<<新しいお友達・終わり>>

(2009.12.12)